

## 学生のストレスコーピングパターンと実習成績

Research of the Coping with Stress of Occupational Students Reference to Affective Domain during Field Work

中島 ともみ/田口 真司

Tomomi Nakajima / Shinji Taguchi

日本医療福祉専門学校 作業療法学科

Department of Occupational Therapy Japan college of Medical Care and Welfare

キーワード：SCI・ストレスコーピング・実習成績

## I. はじめに

我々は、第19回教育研究大会において、実習以前にコーピングの多様性に乏しい学生は、高いストレス下と言える実習時に多様なコーピングを採用する事ができない傾向が見られた事を報告した。そこで今回、日常における学生のストレスコーピング変化と実習におけるコーピングスタイルとの違いを知る為、1年間を通してラザルス式ストレスコーピングイベントリー（SCI：以下SCI）<sup>1)</sup>を実施した。また、ストレスコーピングのスタイルによる、実習時の情意領域への影響を調査する目的で、実習時の評価と比較検討したので報告する。

ここで言うコーピングとは、「自らの資源に負担をかけたり、あるいは、それを超越すると評価したりした特定の外的・内的要求を何とか処理しようとする認知的・行動的努力」<sup>2)</sup>である。コーピングは、「チャレンジする傾向、積極性を示唆する：認知的ストラテジー」と「圧力に耐えられないので、情動の軽減を図る傾向や消極性を示唆する：情動的ストラテジー」とに大きく大別される。また、それらは更に8種の対処型（Pla：計画型、Con：対決型、See：社会的支援模索型、Acc：責任受容型、Sel：自己コントロール型、Esc：逃避型、Dis：隔離型、Pos：肯定評価型）に大別されている<sup>2)</sup>。

## II. 対象と方法

対象は、調査に協力を同意したN作業療法養成校における1年次学生31名、入学時の年齢 $22.6 \pm 5.7$ 、男性15名・女性16名。入学直後、前期終了時、後期見学実習前、後期見学実習後に記名式でSCIを実施、同時に「ストレスを感じた時にそれをどのように解消したか」のタイトルを提示して400字程度で記述させた。なお、見学実習時における情意領域の評価は、N作業療法養成校見学実習評価表を用いた。（表1）

SCIは、Friedman検定の後、更にクラスター分析と判別分析を行って、実習前の日常におけるクラスターの変化

と実習時のコーピングスタイルを検討した。また、実習時の情意領域の評価点と実習時のコーピングとの関連については、Spearmanの順位相関係数を用い検討した。記述形式の調査は、ラベル名をつけカテゴリーにまとめる形でその質的变化をSCIと併せて比較検討した。

SCI実施時期は、入学直後・前期終了時・見学実習前・見学実習後の四回である。それぞれの時期で、＜緊張を感じた状況＞に対象となった内容の多くを占めたのは、入学直後では、入学前後の不安や日常生活上の問題。前期終了時では、前期科目試験に関する問題であり、学生生活とそれらに付随する問題であった。後期に入り、見学実習前・後のSCIでは、ほとんどの学生が、＜緊張を感じた状況＞で実習に関する事を上げていた。

表1. 見学実習評価表（情意領域のみ提示）

	評定
目標4）前職業人として適切に行動する。	5 4 3 2 1
・ 守秘義務を守る	
・ 対象者に配慮した接遇	
・ 必要に応じた、報告・連絡・相談	
・ 意欲的に取り組む姿勢	
・ 安全への配慮	
	評価基準
5	自ら気づき、改善し実行する事ができる。
4	助言・指導を受けて実行できる。もしくは8割程度できる。
3	多くの助言・指導を受けて実行できる。もしくは6割程度できる。
2	多くの助言・指導を受けて、改善傾向にあるが不十分である。もしくは4割程度実行できる。
1	助言・指導を受けても改善できない。もしくは2割以下である。

表2. ストレスコーピングの変動

	有意確率
Co-Em (認知的ストラテジー — 情動的ストラテジー)	0.848
Pla:計画型	0.006
Con:対決型	0.248
See:社会的支援模索型	0.007
Acc:責任受容型	0.055
Sel:自己コントロール型	0.765
Esc:逃避型	0.000366
Dis:隔離型	0.626
Pos:肯定評価型	0.344

P&lt;0.01

### III. 結果と考察

#### 1. ストレスコーピングの変動

コーピングの各対処型別での時期別変化は、計画型・社会的支援模索型・逃避型においてのみ有意差が認められた。また多重比較による検討では、計画型で実習後が前期終了時より有意に高く、逃避型で実習後が前期終了時より、有意に低かった。しかし、その他の時期と他のコーピングでは有意差が認められなかった。(表2)

前期終了時は試験、実習後は実習がストレッサーであり、実習では逃避活動をする暇もなく、とにかく何かしらを試みる事で対応していた様子が示唆された。

#### 2. コーピングパターンの分析結果

一方、4度のSCI実施データの全てを対象に、クラスター分析と判別分析を行った。4つのクラスターの特徴は、以下のものであった「I:情動的・認知的ストラテジー共に低く、全てのコーピングが低い。II:情動的ストラテ

ジーを中心に、コーピングは逃避型・隔離型・肯定評価。III:情動的・認知的ストラテジーとも平均的で、コーピングは計画型・社会的支援模索型・肯定評価型をよく用いている。IV:認知的ストラテジーが高い、全てのコーピング対処型で平均以上、計画型・対決型・社会的支援模索型・責任受容型・肯定評価型をよく用いている。」(図1)

#### 3. クラスターの変化

実施時期による個人のクラスターの変化は、4つのグループに分類できた。

IIのパターンを示す事はなく、情動的ストラテジーをあまり用いないグループ、IVのパターンを示さず、認知的ストラテジーをあまり用いないグループ、どちらのストラテジーも強くは用いられないグループ、対象によって認知的ストラテジー・情動的ストラテジーを両極端に使い分けるグループの4分類となった。日常生活におけるコーピングパターンが、ある程度見学実習時にも同様のパターンで用いられていた事が推測された。

#### 4. 実習成績との相関性

これらのストレスコーピングの分析をふまえ、コーピングスタイルが見学実習での情意面での評価に影響があるのではないかと推測し、検討した。結果、実習時のコーピングのタイプ別と実習の情意面での成績には相関性は認められなかった。(図2)

しかし、記述式のカテゴリライズからは、実習時のストレスの対応には特徴が見られた。Iでは、気分転換目的の活動が多様性に乏しく、今後の行動計画に具体的性が欠けていた。IIでは、気分転換が主であり、行動計画に乏しかった。IIIでは、気分転換・行動計画の両方認められるが、程度は実習時以外の普段どちらをよく用いているかに関連性があった。IVでは、行動計画を闇雲に実行することでなんとか解決しようとしているが、気持ちを落ち着ける事が出来ず、冷静さに欠ける事が傾向としてみられた。

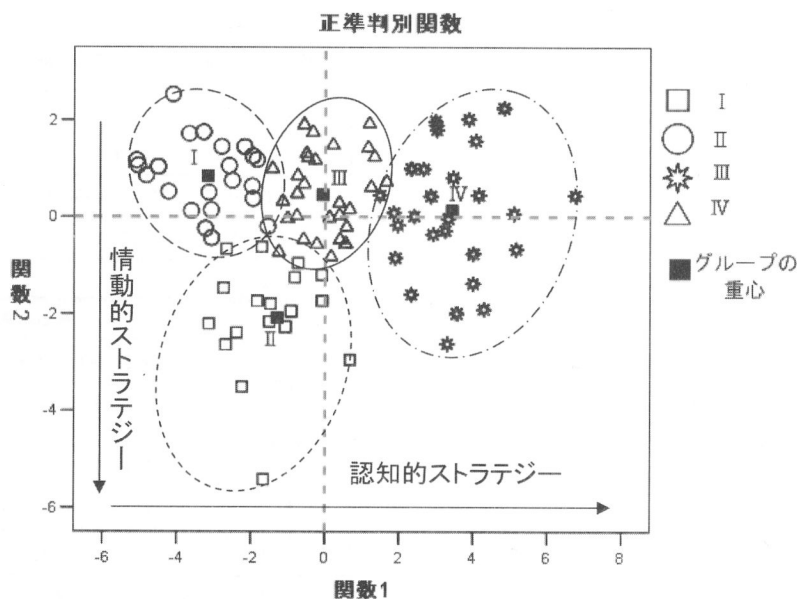


図1. &lt;2&gt;コーピングパターンの分析結果

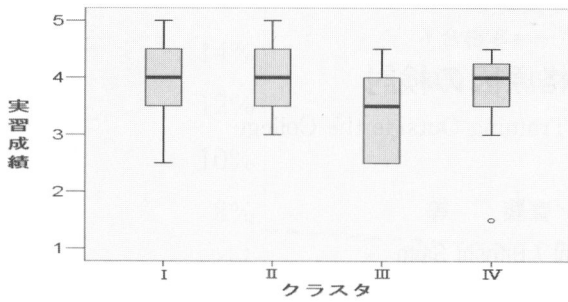


図2. 実習成績との相関性

評価とコーピングに相関性が見られなかった事は、対象者に初めて直接触れる評価を含む評価実習や治療計画と実施を伴う長期実習と比べて、見学実習では課題として求められる水準が低い為であったのか、その他の要因が考えられるのかは、今後継続的にSCIを実施する事でさらに検討

して行きたい。

#### 文 献

- 1) 日本健康心理学研究所 著：ラザルス式ストレスコーピングインベントリ（SCI）．実務教育出版，1996．
- 2) 加藤 司 著：対人ストレス過程における対人ストレスコーピング．ナカニシヤ出版．2007．